

県美プレミアム 2016年 3.19^土 – 6.19^日

《小企画展》

中西 勝 展

画業と生涯を偲んで
—兵庫県所蔵作品を中心に—

展示室 1



1. 中西 勝《日本アクロバット》1956年 油彩・布

《特集》

黒のひみつ

美術のなかの黒をめぐる

展示室 2

展示室 3

展示室 4

展示室 6



2. 斎藤義重《複合体102-1・2》1984年 ラッカー、木、ボルト

展示室 5 近現代の彫刻 / 安藤忠雄コーナー

小磯良平記念室

金山平三記念室



開催趣旨

2016年度県美プレミアムIでは、小企画として「中西勝展 画業と生涯を偲んで—兵庫県所蔵作品を中心に—」を開催します。兵庫県立美術館が所蔵する代表作と、生前の作者から兵庫県と美術館にご寄贈いただいた作品を展示し、その芸術の本質を探ります。

また特集「黒のひみつ 美術のなかの黒をめぐる」では、美術作品に使われる黒色に焦点をあてた展示を行います。ひとことで黒といっても、実はさまざまな表情をみせる奥深いこの色。絵画や彫刻、版画などそれぞれの作品の中で黒がどのような役割を果たしているのかを、4つの章に分けてご紹介します。

県美プレミアム

兵庫県立美術館は、前身の近代美術館時代から数えて約45年にわたり収集活動を続けてきました。現在9,000点を超える作品を収蔵しており、それらはこれまでの収集方針を反映して、国内外の近代彫刻と版画、日本近代の名作、兵庫ゆかりの作品、関西の現代美術に大別されるとしても、内容は実に多岐にわたり、一瞥しただけではその総体をとらえきれません。そこで、当館では、1年を3期に区切り、個々に展示のテーマを設けることによって、横断的にコレクションを紹介し、変化ある常設展示室の演出を心掛けています

開催情報

会期

2016年3月19日(土)～6月19日(日)

休館日：月曜日(3月21日は開館)、
3月22日(火)

開館時間：午前10時～午後6時

特別展開催中の金・土曜日は夜間開館
(午後8時まで)

※入場は閉館の30分前まで

会場：兵庫県立美術館 常設展示室(1階・2階)

※《特集》「黒のひみつ 美術のなかの黒をめぐる」第4章は、次の日程で展示替えを行います。

前期：3月19日[土]～5月1日[日]

後期：5月3日[火・祝]～6月19日[日]

観覧料

団体料金……20名以上の料金

セット料金……特別展とのセット割引料金

※65歳以上は一般料金の半額

※障がいのある方とその介護の方1名は半額

観覧料	当日	団体	セット
一般	510円	410円	306円
大学生	410円	330円	246円
高校生	260円	210円	156円
中学生	無料		

展覧会内容

展示室 1

《小企画展》

中西 勝 展

画業と生涯を偲んで
—兵庫県所蔵作品を中心に—

中西 勝(なかにし・まさる 1924-2015)は大阪市に生まれ、1949(昭和 24)年に神戸市内の中学校の美術専任教諭となったことから神戸に移り住んで、2015(平成 27)年 5月に没するまで神戸の地で制作を続けた洋画家です。この間、兵庫県内の実力作家として、県内の美術界をリードすると同時に、豪胆と繊細をあわせもつユニークな人柄によって、美術の分野にとどまらず、ひろく県内の芸術・文化の中心的存在であり続けました。

神戸移住の同年、二紀展に出品し二紀大賞を受賞した《無題》(1949年、兵庫県立美術館蔵)は、最初期の代表作で、終戦直後の神戸の闇市に取材したといわれる情景が哀感をもって描かれています。抒情的かつ詩的なこうした作者の側面は、空想の人物と星・月・華を鮮やかな色彩で描いた 1980年代以降の作品に引き継がれ、晩年の作品群の核となっています。

一方、初期の代表作《日本アクロバット》(1956年、兵庫県立美術館蔵)に見られる、社会とそこに生きる人々への鋭い眼差しも重要で、1965(昭和 40)年から 1970(昭和 45)年にかけての世界旅行での見聞を描いた《大地の聖母子》(1971年、第 15回安井賞受賞作、東京国立近代美術館蔵)や《棲まう(ソピロテ)》(1978年)など、60余年の画歴の頂点をなす作品の基盤となっています。



3. 中西勝《無題》1949年 油彩・布



4. 中西勝《大地の聖母子》1971年 油彩・布
 東京国立近代美術館蔵

展示室 2

《特集》

黒のひみつ

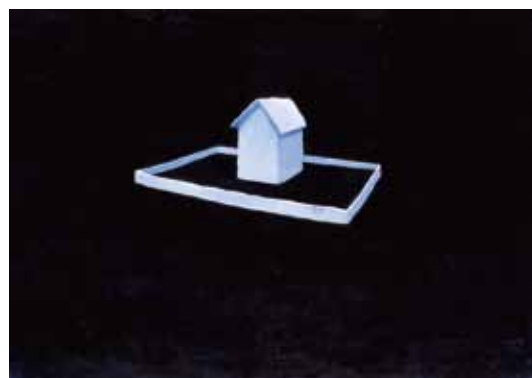
美術のなかの黒をめぐる

第1章 黒が誘う世界観：象徴的な色としての黒

展示室 2 からは、小企画「黒のひみつ 美術のなかの黒をめぐる」として、当館のコレクションのなかから黒色を使った表現が特徴的な作品を紹介します。

第1章は、黒がなんらかの象徴的な意味を担う作例をご紹介します。

鴨居玲が描いた、黒い背景に沈みこむような人物たち。それは、対比するように置かれた鮮やかな色によってさらに際立ちます。正木隆は、ありふれた風景を描きましたが、特定の部分を青白く残し、それ以外を暗く塗りこむ独特の方法をとりました。黒色を使うことによって生じる神秘的で厳かな雰囲気、あるいは恐さや、孤独感、艶やかさなど、そこには多様なメッセージを読み取ることができるでしょう。私たちを惹きつけてやまない黒の世界観にじっくり浸ってみてください。



5. 正木隆 《造形 00-7》2000年 油彩・布

展示室 3

《特集》

黒のひみつ

美術のなかの黒をめぐる

第2章 造形のなかの黒：絵画や彫刻における黒の役割

第2章では、絵画や彫刻に使われた黒が、作品の構成に重要な効果をもたらしている作例をご紹介します。

横尾忠則は、風景画の空や海を黒く塗ることで、明るい色彩で描いた他の部分との対比を際立たせました。そこにあるはずのパーツがぼっかりと空くだけで、まったく別の世界に迷い込んだかのような不思議な雰囲気になります。斎藤義重による独楽のような立体作品は、形態から生じる軽やかさと黒がもたらす重量感を併せ持っています。他の色を引き立てたり、全体のバランスをまとめたり、または重さを感じさせたり。実はさまざまな役割を果たす黒について考えてみましょう。



6. 元永定正 《作品 N.Y.No.1》1967年 アクリル・布

展示室 4

《特集》

黒のひみつ

美術のなかの黒をめぐる

第3章 さまざまな黒：素材や技法によって異なる表情

第3章では、素材の違いによる黒の表現の豊かさをご紹介します。

福岡道雄は、縦 2.3m、横 3.2m の強化プラスチックの表面に、「何もすることがない」という言葉をくりかえし刻みしました。小さな文字が無数に広がる壁のような作品を前にすると、まるで、言葉の波に圧倒されるようです。また河口龍夫の《DARK BOX 2007》は、暗闇を閉じ込めた鉄の箱です。目には見えないけれど、鉄の板の向こうには確実にあるはずの闇の世界。私たちに、それが「ある」と想像することしかできません。これもまた黒の素材のひとつと言えるでしょう。技法や材質によって全く異なって現れる黒色の違いを楽しんでみてください。



7. 河口龍夫《DARK BOX 2007》2007年 鉄、闇

展示室 6

《特集》

黒のひみつ

美術のなかの黒をめぐる

第4章 線の妙：黒い線がいきる

第4章では、黒い線に注目して、線そのものの良さが生きている作品をご紹介します。

アルベルト・ジャコメッティによる一連のデッサンでは、彼が過ごしたパリの日常風景が素早く的確な線で写し取られており、当時の空気がよく伝わってきます。吉川霊華は、細く優美な線によって、人物の表情や衣装の髪を巧みに描きだしました。細かな線を追っていくと、それがいかに熟練した唯一の線だったかが分かります。太かったり細かったり、真っ直ぐだったりぐねぐねしていたりと、くるくると表情を変える黒い線。線そのものを辿り、また線それだけで紡ぎ出されるイメージの豊かさに触れてみましょう。



8. 森田子龍《坐組上》1969年 墨・紙（前期展示予定）

展示室 5 近現代の彫刻 / 安藤忠雄コーナー

当館は、版画とともに彫刻を収集の柱のひとつに据えてきました。

展示室 5 では、ロダンに始まる近代から現代にかけての彫刻の名作を紹介します。

また、当館の設計者である建築家・安藤忠雄の業績の一部を模型、写真、映像などで紹介するコーナーを展示室東側に併設します。

小磯良平記念室

神戸生まれの小磯良平（1903-1988）は、近代洋画を代表する巨匠のひとりです。確かなデッサン力に裏打ちされた人物像は、現在も私たちに魅了します。小磯の代表作を展示する記念室では、小磯がどのように画面を構成し、理想的な空間を描こうと試みたのか、《T嬢の像》や《洋装する女達》などの人物像を中心に紹介します。

小磯良平の作品画像を使用される場合には、別途、著作権処理が必要となります。
詳細はお問い合わせください。



小磯良平《洋装する女達》1939年 油彩・布

金山平三記念室

神戸に生まれた金山平三（1883-1964）は日本各地を旅行して描いた風景画で知られています。旅先に逗留し、自らの描きたい風景を追求して描きました。今回の展示では、代表作《大石田の最上川》など、金山が自然の観察から生み出した美しい色彩表現にご注目ください。



9. 金山平三《大石田の最上川》1948年頃 油彩・布

関連イベント

こどものイベント

日時：5月28日（土）午前10：30—午後3：30

場所：アトリエ2

※ 要事前申込・要参加費

学芸員によるギャラリートーク

日時：3月26日（土）…【黒のひみつ】

4月23日（土）…【中西勝展】

6月4日（土）…【黒のひみつ】

いずれも午後4：00—午後4：40

※ 要観覧券・定員なし

ミュージアム・ボランティアによるガイドツアー

日時：会期中の金・土・日 午後1：00—午後1：45

集合場所：1階エントランス

※ 要観覧券・定員なし

お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL: 078-262-0901 (代表) FAX: 078-262-0903

取材・写真提供に関すること

営業・広報グループ

TEL: 078-262-0905 (グループ直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

小企画 中西勝展 画業と生涯を偲んで —兵庫県所蔵作品を中心に—

担当学芸員：西田桐子

e-mail: nishida@artm.pref.hyogo.jp (西田)

特集 黒のひみつ 美術のなかの黒をめぐる

担当学芸員：小野尚子・小林公

e-mail: ono@artm.pref.hyogo.jp (小野)

いずれも、TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913

広報用画像について

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。別紙の申込書をご使用ください。

小磯良平の作品画像を使用される場合には、別途、著作権処理が必要となります。詳細はお問い合わせください。

同時開催の展覧会

特別展

「生誕180年記念 富岡鉄斎—近代への架け橋—展」

3月12日（土）—5月8日（日）

特別展

「1945年±5年 激動と復興の時代 時代を生きぬいた作品」

5月21日（土）—7月3日（日）

横尾忠則現代美術館での同時開催*

横尾忠則「幻花幻想幻画譚」

2015年12月12日（土）—2016年3月27日（日）

横尾忠則「わたしのポップと戦争」

4月16日（土）—7月18日（月・祝）

※ 特別展又は県美プレミアムのチケット（半券可）のご提示で、団体割引料金でご覧いただけます。
（詳細はホームページなどでご覧ください）

交通案内

阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から南に徒歩約8分

JR神戸線灘駅から南に徒歩約10分

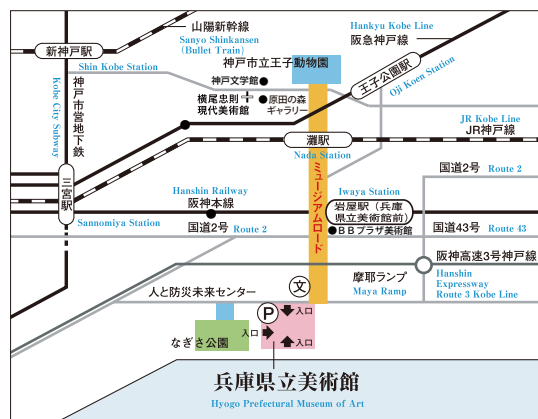
阪急神戸線王子公園駅から南西に徒歩約20分

神戸市バス・阪神バス「県立美術館前」下車すぐ

地下駐車場：乗用車80台収容・有料

※ ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください

※ 団体バスでお越しの場合は、バス待機所の予約をお願いします



県美プレミアム

《小企画》中西 勝 展 画業と生涯を偲んで ―兵庫県所蔵作品を中心に―
《特集》黒のひみつ 美術のなかの黒をめぐる

兵庫県立美術館

2016年3月19日(土) - 6月19日(日)

広報画像申込書

営業・広報グループ 宛 FAX (078) 262-0903

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 電話 (078) 262-0905 (直通)

ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データ (.jpg) をお送りいたします。

番号	作家名・作品名・制作年 など
1	中西 勝 《日本アクロバット》1956年
2	斎藤義重《複合体 102-1・2》1984年
3	中西 勝 《無題》1949年
4	中西 勝 《大地の聖母子》1971年 東京国立近代美術館蔵
5	正木 隆 《造形 00-7》 2000年
6	元永定正《作品 N. Y. No.1》1967年
7	河口龍夫《DARK BOX 2007》2007年
8	森田子龍《坐組上》1969年
9	金山平三《大石田の最上川》1948年頃

※小磯良平の作品画像を使用される場合には、別途、著作権処理が必要となります。詳細はお問い合わせください。

※上記画像を媒体掲載される際には、記載の作家名・作品名・制作年などを必ず入れてください。

※作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変はできません。

※画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません。(会期終了まで)

※再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

※Web サイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施してください。

※基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で営業・広報グループまでお送り願います。

貴社名			
媒体名	新聞・雑誌・ミニコミ 『 』 TV・ラジオ・インターネット		
ご担当者名			
ご住所	〒		
電話番号		FAX	
メールアドレス	@		
URL			
掲載・放送予定日		画像到着希望日	
読者・視聴者プレゼント用招待券 (最大5組10名まで 本展を媒体でご紹介いただける場合に限り)		組	名分希望

※本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体 (VTR/DVD)、URL などを、上記営業・広報宛にお送りくださいますようお願いいたします。

※展覧会場の取材、撮影をご希望の場合は、上記までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。